IFLAケベック大会に参加して

メタデータ	言語: 出版者: 日本図書館協会 公開日: 2024-01-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦,太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000187

小特集●IFLAケベック大会レポート

IFLAケベック大会に参加して

三浦太郎

今年8月10日～14日，カナダ・ケベック州の州都ケベック・シティにおいて「境界線なき図書館：世界規模の相互理解へ向けた船出」をテーマとする「世界図書館情報会議（WLIC）：第74回IFLA年次大会」が開催された。120か国以上から約3,000名の図書館関係者が参加し，日本からも50名を超える参加者が集まった。IFLA分科会委員の方々には，お忙しいところを遠路ご参加いただき，この場をお借りして感謝申し上げたい。以下，今年の大会テーマと，2日目に開かれた「日本関係者交流会」を中心にご報告する。

大会テーマ

本大会のテーマは，国や文化の垣根を超えて図書館交流を図ることにあり，そのための相互理解や多文化共生を実現することが焦点であった。開催国が多文化主義国家カナダであったことからもその意図は明瞭である。すでに深井耀子氏の研究からも明らかにされたように[1]，カナダは民族的多様性が社会の基本的特徴をなしており，人種や民族的ルーツ，言語，宗教的価値観の異同を超え，エスニック集団の持つ集団的独自性を維持・発展させることが国家政策として重視されている。

初日（10日）開会式の構成にも，大会テーマのメッセージは強くうかがわれた。冒頭で式辞を述べたカナダ総督ミカエル・ジャン氏は，ハイチ難民として幼年期を過ごし，カナダ公共放送局（CBC）のジャーナリストとして成功を収めたのち，総督に就任した人物として知られる。人種，国，言語の相違を克服したジャン氏が，“図書館は多様なサービスやコレクションの提供を通じて，唯一的な役割を果たしている”と述べたとき，多様な価値観の保障という図書館理念は，そこに確かな実感を伴って参加者に伝わったと言える。

また，大会組織委員長のクロード・ボナリー氏は，式辞の中で“参加者の文化的背景や専門職としての実践経験を，あらゆる境界を越えてこの5日間共有していこう。そうして参加者が多様性を

▲「世界図書館情報会議」（第74回IFLAケベック大会）会場の様子

▲初日の「文化の夕べ」ではカナダ史劇も上演された

認識することで，地球規模の相互理解に向けた鍵は得られると確信している”と述べて，各国・地域の図書館実践に現れる多様な文化的広がりを十分に理解し，それらを尊重していく姿勢の大切さを力説した。続いて演壇に立ったIFLA会長クラウディア・ラックス氏も，近年のハリケーン・カトリーナや中国四川省大地震などの自然災害に際して，世界規模で図書館協力が実現されている点を指摘し，“多文化社会において相互理解を導く自由な情報へのアクセスが，あらゆる図書館の果たすべき機能である”と主張した。

開会式ではその後，カナダの先住民族イヌイットの伝統的なスロート（喉声）シンガー2人による歌唱や，ケベック詩人によるフランス語詩の朗読が続いたが，いずれも歴史的・文化的独自性を前面に打ち出し，“異質なもの”への理解を意識させる構成であったと思われる。同日夜には「文化の夕べ」が開かれ，ヨーロッパ人に発見される以前のカナダ史劇や，地元ケベックのトリオによる音楽演奏，さらに現代舞踊などが上演されたが，言語の介在が少ないこともあってか，異質性はあまり意識されなかった。これに比べ，開会式ではとりわけフランス語／詩の多用を通じ，ケベック土着の文化性が色濃く表れる内容となっていた。そこには，知識や文言のレベルではなく，現実的対応に踏み込んで相互理解の本質を問いかけようとする意図が感じられた。

会期中の分科会の発表では，各国・機関におけるさまざまな図書館実践が報告された。発表の要綱原稿は現在IFLAウェブサイト上に公開されているので[2]，関心の方はぜひご覧いただきたい。

日本関係者交流会

国際会議に際して各国の関係者と交流を深めるのは大切だが，大会2日目（11日）の晩に日本側参加者35名とカナダ在住の図書館員5名，それからIFLA事務局長のピーター・ロー夫妻を招いての夕食会を開催することができた。これはIFLA学校図書館分科会の中村百合子氏（同志社大学）と，カナダ・オンタリオ議会図書館の榎澤康子氏がコーディネータとなり，日本とカナダの図書館関係者の交流機会を設けてくれたもので，今回IFLA大会参加を縁に知り合うことのできた参加者にとって，意義深い時間となった。

日本からは，IFLA児童・青少年分科会委員の依田和子氏（よこはまライブラリーフレンド），政府情報・公的刊行物分科会委員の古賀崇氏，多文化社会図書館サービス分科会委員の平田泰子氏（なお古賀氏と平田氏はJLA国際交流事業委員を兼務しており，本特集にも寄稿している）や，JLAの後援する日通旅行ツアーで参加した宇治郷毅氏（同志社大学），大澤正雄氏（西東京市立図書館図書館協議会），山崎真稔氏（玉川大学図書館）ら11名，さらには個人旅行で参加した各館種の図書館員，大学研究者らが参加した。大会前に参加を把握できた方々には日本で連絡することができたが，数名の方は現地で初めて登録がわかり，飛び入りの形でご参加いただいた。

ロー博士の出席にあたっては，デイジー・コンソーシアム会長の河村宏氏に仲介の労をとっていただいた。河村氏は今年7月，障害者に関する国際ワークショップの席でロー博士と意見交換し，

▲展示ホールの様子。本大会には，世界120か国以上から約3,000名の図書館関係者が集まった

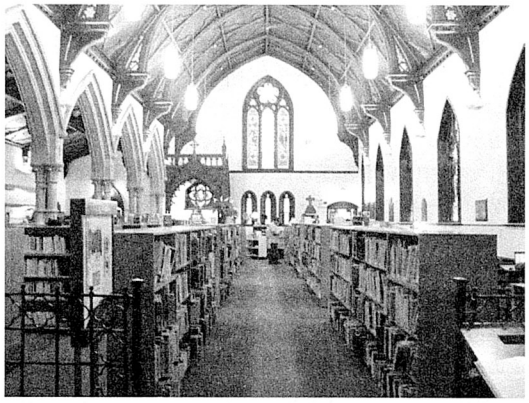
その際に博士から，IFLAでは韓国や中国に比べ日本との結びつきが弱いので，もっと交流を深めたい意向のあることを聞いており，今回，博士に交流会への参加を打診いただいたものである（当初は河村氏も交流会に参加予定だったが，デイトン・M・フォーマン博士記念賞の授賞夕食会と日程が重なり，参加は適わなかった）。本交流会の実現にあたり，中村氏，榎澤氏，そして河村氏に改めて謝意を表したい。

ロー博士は，大会後の今年9月にジェニファー・ニコルソン氏（オーストラリア図書館情報協会・前事務局長）にIFLA事務局長の任を譲ったが，それまで堅実な手腕でIFLAの事務を支えてこられた人物である。本大会最終日の閉会式でその活動が紹介され，参列者から拍手が鳴りやまなかったことは，博士の温厚で誠実な人柄をうかがい知るひとつのエピソードであろう。博士は交流会でのあいさつの中で“図書館界が世界規模で交流を図る中で，日本の果たすことのできる役割は重要である”と期待を述べられた。今後，IFLAの一機関としてJLAがどのような国際活動を具体的に展開できるのか，検討の時期にさしかかっていると感じる。分科会委員の派遣をもっと積極的に働きかけたり，国際的調査の実施・協力に取り組むなど，できることから議論していきたい。

また，昨年のIFLAダーバン大会報告の中で宮部頼子前委員長が指摘していたように[3]，諸外国のIFLA参加者には図書館協会会長・副会長・事務局長のような，国・機関を代表する人びとが多い。個別の図書館や図書館員の国際交流は大事であるが，それとは別に，JLAでも責任ある立場で実務的問題を議論できる人物がIFLA大会に継続的に出席し，諸外国の関係者と意見交換を行い交流促進に努めることが重要だと思われる。

*

最後に，来年のイタリア・ミラノ大会に，再び日本からの多くの図書館関係者と参加できることを楽しみにしております。国際交流事業委員会のサイト上にも情報を更新していく予定です[4]。



▲大会会場近くの教会を改装した公共図書館。現地のさまざまな図書館を訪れることも，楽しみのひとつだ

注

1）深井耀子『多文化社会の図書館サービス：カナダ・北欧の経験』青木書店，1992，234p.

2）“World Library and Information Congress : 74th IFLA General Conference and Council”. Program and Proceedings［http://www.ifla.org/IV/ifla74/Programme2008.htm］（last-access：2008-10-22）

3）宮部頼子「IFLAダーバン大会を振り返って」『図書館雑誌』vol.101, no.12, 2007.12, p.821-822.

4）“日本図書館協会”国際交流事業委員会［http://www.jla.or.jp/kokusai/index.html］（last-access：2008-10-22）

（みうら　たろう：JLA国際交流事業委員会委員長，明治大学）

［NDC 9：010.6　BSH：国際図書館連盟］